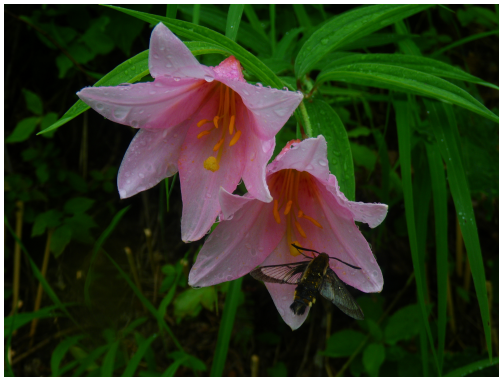
雪国に消えゆくユリの物語

大曽根陽子



▲梅雨時に花期を迎えるヒメサユリ。

草原が霧雨に煙っている。ふと目をあげると、夕闇に淡いピンク色のユリがぽつりぽつりと浮かびあがって見える。湿気をたっぷり含んだ夜気には、月桃に似た甘い花の香りが混じっている。

福島県・奥会津地方の只見町。ここ数年、私たちはこの町で「ヒメサユリ」の調査をしている。開花は梅雨の始まる頃。梅雨寒の中、雨に濡れ、滑る足場に気をとられながら行う調査はひどく消耗する。それでも、このユリが折々に見せてくれる姿は、疲れ切った私たちが息をのんで立ち尽くしてしまうほどに美しい。

日本はユリ大国である。世界に約 100 種あるユリのうち、15 種が自生する。いずれも姿や香りに特徴があり、世界で流通する園芸品種の多くが日本のユリの血を引いているといわれている。なかでも、オリエンタルハイブリッドと呼ばれるひときわ華やかな系統を生み出したグループがある。ヤマユリ亜属のユリたちである。カサブランカの原種となったヤマユリやタモトユリ、立ち姿も優雅なササユリ。その錚々たる顔ぶれの中に紛れ込んだ小ぶりの儚げなユリ。それがヒメサユリだ。絶滅危惧種で、なぜか日本でも豪雪地帯のごく狭い範囲にしか分布しない。

私たちはこの変わりダネのユリに惹かれ、その生態を調べはじめた。調査地に選んだのが只見町。ここだけで、2000 以上もの個体を有する日本最大の自生地だ。なぜこの町にはヒメサユリが多いのだろう。その謎が解ければ、絶滅危惧種であるこのユリを保全する手立ても見つかるかもしれない。

ヒメサユリは一般に「高嶺の花」だと思われている。有名な自生地といえば、ここ奥会津の浅草岳や、飯豊連峰・吾妻連峰など宮城県、福島県、新潟県、山形県の県境付近の山々。こうした豪雪地域の山頂には初夏まで雪に閉ざされた草原があり、そこがヒメサユリのすみかとなっているからだ。

ところが、只見ではわざわざ山に登らずとも自然のヒメサユリが見られる。花の季節なら、町のいたるところにある切り立った崖の上を丹念に眺めればいい。風にゆれるピンクの花が見つかるはずだ。こうした崖は、深く積もった雪が山の斜面を削り取ってできたもので、やはり豪雪地特有の地形である。

雪深い山上の草原と町内の崖。

一見まったく違う二つの生育地だが、実は大きな共通点がある。いずれも深く積もった雪が、背の高い植物の生育を妨げたり、山の斜面を削ったりして、明るい草地が維持されている。野生のヒメサユリの背丈はせいぜい 60 ㎝。大型の植物が繁茂する場所では、とても生きていけない。ヒメサユリはあえて他の植物があまり生育しない雪深い草原や切り立った崖などの厳しい環境を生育地とし、競争を避ける道を選んだようだ

雪が作り出す崖。写真の中央でちょうど調査をしている ▶

「ヒメサユリは雪が作った地形を好む。」
町でヒメサユリの個体調査をしている「只見の自然に学ぶ会」の T さんは、ヒメサユリの生育地をこう表現する。言い得て妙だ。実際、こうした自然環境はヒメサユリによく合っているようで、私たちが調べたところ、この二つの生育地ではヒメサユリはゆっくりではあるけれど確実に成長し、子孫を残している。只見が「日本最大の自生地」であるのはこうした自然環境にひときわ恵まれているからに違いない。

ヒメサユリにはもう一つの姿がある。いや、「あった」と言ったほうがよい。
里山植物としての姿だ。明るい環境を好むヒメサユリは、かつて、牧草地や萱場など人間が作り出した草地にもたくさん咲いていたらしい。町内のお年寄りは「子供の頃は裏山にたくさんヒメサユリが咲いていた。花の時期には一抱えも切ってきて家に飾った」と話してくれた。しかし、戦後のエネルギー革命以降、日本の農村では伝統的な土地利用が衰退した。只見でも里山はスギ林などに代わり、里山をすみかとしていたヒメサユリも消えた。
現在、里山植物としてのヒメサユリは各地で危機的な状況だ。
昨年、私たちは只見での調査を終えたその足で、新潟県村上市の笹川流れに向かった。ここは、ヒメサユリとしては珍しい沿岸域の生育地で、一度、海辺に生きるヒメサユリを見てみたかったのだ。しかし、かつてヒメサユリがいたという海岸沿いの雑木林に、その姿はなかった。たまたま通りかかった集落の人に話を聞くと「以前はずいぶん咲いていたが、最近は全く見ない」という答えが返ってきた。「間に合わなかった。」無念の思いが胸に広がった。
喜多方市、南会津町など、定期的な草刈りや火入れで里山のヒメサユリを保全している群生地にも足を運んだ。いずれも、人の手で十分に管理されているせいか、野生のヒメサユリよりも一回りも二回りも大きい個体が密集し、見事な大群生をなしている。普段、儚げな姿を見慣れている私たちはその華やかさに目を瞠った。しかし、もう少しよく見てみようと花に手を伸ばした途端、近くに立っていた監視員に鋭く制止された。聞けば、病害虫に弱く、時々大きな被害がでるので用心しているのだという。どちらも周囲に他のヒメサユリの生育地がない孤立した群生地だ。一度、絶やしてしまえば、自然に再生するのは難しいだろう。

「ここは木を伐ったら自然にヒメサユリが生えてきた場所。」
ある日、「学ぶ会」の W さんが、そう言って連れてきてくれたのは町を見下ろす高台だ。森が開かれ草地になったその場所には、かなりの数のヒメサユリが咲いていた。

この高台の背後に続く山はヒメサユリの自育地になっている。どうやら、そこから種子が飛んできて、自然に定着したようだ。そう考えた時、ふと里山ヒメサユリ再生の糸口が見えたような気がした。「自然環境との連続性」そんな言葉が思い浮かぶ。ヒメサユリの自生環境に抱かれた只見なら、初夏の集落にこのユリが色を添える風景を取り戻すことができるかもしれない。

◀ヒメサユリが自然に再生した高台。かつての里山はこんな景色だったのだろうか。